

## 中世博多の幻住派僧

伊 藤 幸 司

はじめに

日本の禅宗世界が、中世最大の国際貿易港である博多から本格的に展開したことは周知の事実である。

宋・元文化の移入者であった禅宗は、その初伝の地である博多で対外交渉の門戸に見合った性格をもって展開していた。川添昭二氏は、これを「博多禅」と呼び、京都や鎌倉で展開した禅と対置して性格付けている。<sup>①</sup>

博多における禅宗展開の端緒となったのが、鎌倉初期に博多津唐房（唐房＝宋人居住地）在住の宋商人（＝博多綱首<sup>②</sup>）張国安らが檀越となり、大陸から帰国した明庵栄西を開山に迎えて誕生した聖福寺である。<sup>③</sup>それを誇示するかのように、聖福寺の山門には「扶桑最初禅窟」の扁額が掲げられている。鎌倉中期には、博多綱首謝国明が径山の無準師範に学んだ円爾を開山に迎えて聖福寺の隣地に承天寺を創建した。<sup>④</sup>円爾は、帰国後に太宰府の崇福寺にも最初に入寺しており、博多禅の展開はその周辺地域にまで及んでいた。

十三世紀後半からの日中交流は、「渡来僧の世紀」と呼ばれるほど禅僧の交流が活発となった。その端緒は蘭溪道隆の来日であるが、彼は博多湾の対外貿易港の一つであった今津の勝福寺の開山となり、都市博多

にあった円覚寺にも入って禅寺とした。鎌倉末期には、豊後守護で鎮西探題の三番引付頭人であった大友貞宗が、博多湾岸の多々良浜に闡提正具を開山として顕孝寺を開いた。貞宗は、当時の日本でもっとも大陸仏教に精通していた人物の一人である。また、博多息浜むきのよまには蒙古襲来で築かれた石築地に隣接して、博多の居民が月堂宗規を開山として妙楽寺を創建した。博多の禅寺は、博多在住の宋商人たちが檀越であった時代から、鎌倉末期の段階に至って博多商人たちが支える時代へと変貌を遂げたのである。この背景には、博多綱首の故国であった南宋がモンゴルによって滅亡した上に、二度の蒙古襲来によって華人たちが日本に在住しにくい雰囲気となったことで、大陸貿易をになった博多綱首の存在形態に大きな変化があったためである。彼らは、大陸人として博多にコミュニティーを維持することをやめ、次第に日本人と同化したり、博多に在住することなく頻繁に船舶で日中を往復したりするものに分かれていった。

こうした、博多禅の展開の重要な拠点となった禅寺については、聖福寺<sup>④</sup>・承天寺<sup>⑤</sup>・崇福寺<sup>⑥</sup>・円覚寺<sup>⑦</sup>・顕孝寺<sup>⑧</sup>・妙楽寺<sup>⑨</sup>などの諸寺院が寺史や論文などで詳細に考察されてきている<sup>⑩</sup>。しかし、博多禅ゆかりの寺院には、いまだこのような概説がなされていないものもある。たとえば、戦国期の日本禅宗界に大きなインパクトを与えた臨済宗幻住派ゆかりの幻住庵などはその代表であろう。その理由は、中世幻住庵に関する史料の少なさにある。そこで、本稿では博多禅考察の一環として幻住庵に注目したいと考えている。ただし、ここでは幻住庵という寺庵の変遷そのものではなく、幻住庵ゆかりの幻住派僧たちの活動を活写する手法をとりたいと思う。幻住派僧は、十六世紀の聖福寺でも大きなポジションを占めるのみならず、戦国期の都市博多の歴史とも深く関わっており、幻住庵のみにこだわらない方がより豊かな叙述ができると考えるからである。

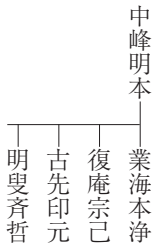
## 一 幻住庵のルーツ

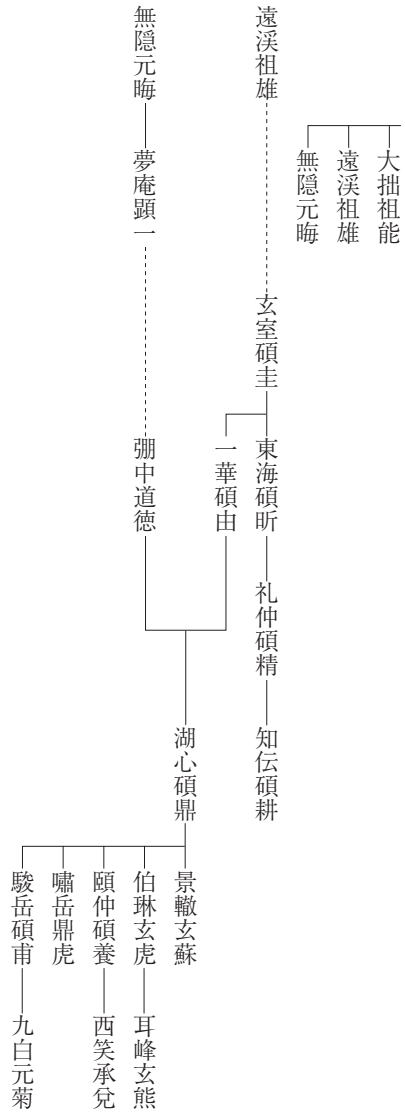
幻住庵の歴史は、鎌倉末期から南北朝期にかけて活躍した無隠元晦<sup>①</sup>にはじまると伝えられる。無隠元晦は、豊前国の大蔵氏の出身で、聖福寺十四世明窓宗鑑にしたがって受戒薙髪したという。明窓宗鑑は、渡来僧蘭溪道隆の弟子であった。延慶三年（一二三〇）に復庵宗己・無雲義天らとともに中国大陸（当時はモンゴル帝国<sup>②</sup>元朝）へ渡海した。なぜ、彼らは大陸をめざしたのであるうか。ここでは、まず幻住庵のルーツを日本禅宗界の歴史のなかから読み解いていくことから話を始めたい。そうすることで、幻住庵をめぐる禅僧の活躍やその歴史的な意義もあきらかになる<sup>③</sup>。

平安後期以降の日本社会では、戒律が乱れた日本仏教を大陸仏教の導入で改革しようとする運動がおこった。とくに、平安末期になると、当時の大陸で最新の仏教とされた禅宗への関心が高まり、多くの日本僧が禅宗のふるさとしてある大陸の江南地域へ渡海し、高僧のもとで修行して帰国した。禅宗は、当時の日本で大陸に開かれた玄関口である博多で繁栄し、その後、京都や鎌倉などにいる政治指導者たちにも受け入れられた。鎌倉中期になると、日本僧が大陸をめざすだけでなく、反対に大陸から日本へやってくる中国禅僧も多数あらわれ、日本禅宗界と中国禅宗界とは海を超えて活発な交流をかわしあう関係へと成長した。日本にもたらされた禅宗は、まさに最新の中国文化そのものであった。中国風の建物が建ちならび、中国語が話され、中国式の生活様式がおこなわれる禅寺は、さながら日本のなかの中国世界といってもよい。だからこそ、日本の禅僧たちにとって最大の関心事は、海を超えて江南地域の高僧に学び、ゆかりの仏教聖地を巡礼することであり、無隠元晦もそのような日本僧の一人であったといえる。

無隠元晦が入元して参禅したのは、中峰明本という禅僧であった。中峰明本は、古林清茂とともに当時の日本僧から人気があった中国禅宗界屈指の高僧である。彼は、念仏と禅との兼修を標榜し、官寺の世界からぬけ出し、杭州天目山の幻住庵に隠遁していた。当時の中国禅宗界では、中峰明本のような世俗と一線をかくした禅僧のもとに、西域・高麗・雲南・日本の人びとも集まっていた。天目山は、杭州から高速道路を車で二時間ほど走ったところであり、現在は山全体がバードウォッチングのメッカとして知られ、そのなかに幻住庵跡や中峰明本の墓所が静かにたたずんでいる。アジアで知られた中峰明本に学んで日本に帰国した禅僧には、無隠元晦のほかにも遠溪祖雄・復庵宗己・古先印元・業海本浄・明叟齐哲・大拙祖能らがあり、彼らは日本禅宗界において幻住派といわれた。禅宗では、とりわけ師弟関係の結びつきが強く、どの師匠に学んだのかという法のつながり（法系）が重要視されている。最終的には、自分の師匠筋の法系をたどっていくと、禅宗のふるさつである中国禅宗界のどのような高僧につながっているのかというのが大事であった。そして、その法系が中峰明本につながるのが、幻住派とよばれる禅僧グループであったのである。幻住派の名前の由来は、中峰明本がいた幻住庵からきている。

〔中世の幻住派法系略図〕





## 二 幻住庵の誕生

無隠元晦は、豊後守護の大友貞宗と関係が深く、彼の援助を受けて入元したと思われる。中峰明本が大友貞宗あてに出した手紙（静嘉堂文庫蔵「中峰明本尺牘」）には、「日本から来た晦禅人（無隠元晦）が自分の左右にあつて世話をしてくれている。（貞宗より）賢禅人が来て貞宗の手紙と砂金を届けてくれた。晦禅人は私の姿を写し賛を求めたので、それを当座の返礼とする」と書かれており、中峰明本に親しくつきそっている無隠元晦の姿がうかがわれる。無隠元晦を援助した大友貞宗は、当時の日本でもっとも大陸仏教界に関心を持っている権力者である。博多で大陸に渡る僧侶とかかわるだけでなく、ときには直接大陸の僧侶のもとへ使者を派遣するなど積極的な活動をしている。無隠元晦も、大友貞宗が期待する日本僧の一人であった。

やがて、中峰明本が至治三年（一三三三）に死去すると、無隠元晦も泰定三年（一三三六）に帰国の途についた。幻住派の禅僧は、帰国後、その多くが中央の権力者とかかわらない林下で活動した。京都から離れた丹波国に高源寺をひらいた遠溪祖雄などはその代表といえる。しかし、無隠元晦は帰国するときにおなじ船に乗りあわせた中国僧清拙正澄の影響であろうか、彼が京都建仁寺の住持となるとよびよせられた。その後も、大友氏泰（貞宗の子）の依頼で筑前顕孝寺に入り、博多聖福寺二十一世として出世し、建仁寺（三十二世）や南禅寺（二十一世）の住持ともなっているように、政権と密接な官寺などで活躍した。このほかにも、壹岐海印寺（安国寺）や豊前宝覚寺（興国寺）もひらいており、彼は京都（中央政界）と北部九州地域（アジアへの窓口）で活躍した禅僧であったといえる。とりわけ、博多近隣の多々良浜にあった顕孝寺は大友氏の外交活動の拠点となった禅寺であり、聖福寺も都市博多の基盤として貿易拠点となっていたことを考えると、無隠元晦は最新の仏教を学び、大陸とのコネクションももっていた禅僧として人気があったことがうかがわれる。延文三年（一三五八）十月十七日に遷化した後、康正二年（二四五六）の百年忌にさいして後花園天皇から法雲普濟禅師の諡号を授かっている。以後、無隠元晦の弟子筋の人びとは、北部九州で活躍し、博多地域の外交・貿易活動にたずさわっていくような動きを見せた。そして、この無隠元晦の塔所として博多湾岸の馬出まいでしに創建されたのが幻住庵であり、その名前の由来は師匠である中峰明本の庵名とおなじという由緒正しきものであった。

### 三 幻住派と大内氏

戦国期から江戸初期の日本禅宗界は、臨濟宗幻住派によって席卷されたといってもいいすぎではない。鎌

倉末期に日本へ伝えられた幻住派は、中央政界で華々しく活躍する禪宗勢力とくらべるとそれほど目立つ存在ではなかったが、戦国時代に躍進するきっかけをつかむ。

十五世紀末に足利將軍家が二つに分裂する大事件が勃発した。この事件は、時の元号をもちいて明応の政変（明応二年・一四九三）といわれている。この政変によって、第十一代室町將軍となった足利義澄によって追放された第十代室町將軍足利義植（よしたね義材・よした義尹・義植と改名するが、ここでは義植で統一）は、復権をかけて西国の有力大名であった周防大内氏をたよって山口へ下向してきた。大内氏は、南北朝時代から活発に外交活動をおこなうグロバル大名であったが、その大内氏の肝いりで文亀元年（二五〇一）に朝鮮国へ派遣されたのが弼中道徳（鳳叔金徳）という幻住派僧であった。彼は、鎌倉末期以来、博多地域で活躍していた無隠元晦系統の幻住派でありながら、遠溪祖雄系統の幻住派ともかわる禪僧であった。大内氏は、新たな人材登用策として博多地域で活躍する幻住派を重要視しようとしていた。ところで、聖福寺に代表される博多の有力な禪寺（官寺）は、それらの住持となるためには室町將軍の發行する任命書（公帖）をもらう必要があった。大内氏は、室町時代から博多への進出手段として、博多の禪寺の住持候補者に対して、室町幕府に吹嘘状（ふきうじょう推薦状）を出すことで、親しい関係をつくろうと努力していた。そのようななか、任命書の發行権を握っていた足利義植が大内氏をたよってやってきたのである。博多の禪寺との関係を強化する絶好のチャンスと考えた大内義興は、文亀三年（一五〇三）足利義植の任命書で一華碩由という幻住派僧を聖福寺の住持とすることに成功した。一華碩由は、筑前国箱崎にいた秦氏の出身で、秦氏の菩提寺であった箱崎建徳寺で出家し景轍元由と名のる禪僧であった。その後、大徳寺系統の禪や曹洞宗の禪を学び、最終的には覚晶庵にいた遠溪祖雄六世の玄室碩圭に師事し、その後継者となった。さまざまな禪を学んだ一華碩由は、覚晶庵を建徳寺にうつして門弟を育成したという。この一華碩由の聖福寺出世以降、彼を前例として玉室碩琳、弼

中道徳、湖心碩鼎といった幻住派僧もつぎつぎと聖福寺へ出世することになる。

永正五年（一五〇八）足利義植は大内義興の協力をえて上洛し、將軍職に復帰した。すでに、足利義植・大内義興との緊密な関係をつくっていた幻住派は、これを背景として新たな權威づけを中央で進めた。永正一四年（一五一七）遠溪祖雄系統の幻住派の総本山ともいえる丹波高源寺が、知伝碩精によって天皇の勅願所となり朝廷から紫衣道場として認められたのである。紫衣とは紫色の袈裟のことで、日本では特別な高僧のみに限って着用を許されていた。禅宗では、京都五山のトップである南禅寺や、大徳寺・妙心寺の住持のみに許された紫衣が、高源寺住持にも認められたのであり、幻住派の格式が日本社会のなかで飛躍的に上がったことをしめしている。こうした幻住派の躍進は、一華碩由の弟子にあたる湖心碩鼎によって完成されていく。

#### 四 幻住派の世紀

一華碩由のあとをついだ湖心碩鼎は、じつは弼中道徳にも師事した無隠元晦系統の幻住派の禅僧でもあった。享祿年間に幻住庵主となり、永正十六年（一五一九）知伝碩精について高源寺住持となつて紫衣を獲得、同十八年に足利義植の任命書で聖福寺百五世として出世、大内義隆の遣明船の正使に拔擢されて明朝（中国）へ渡り、天文十四年（一五四五）には京都五山の頂点である南禅寺住持ともなるなど華々しい活躍をみせたが、聖福寺に新篁院をひらき、永祿七年（一五六四）宗像郡の隆尚庵で死去した。湖心碩鼎は、高源寺を勅願所とし紫衣道場へと導いた知伝碩精などとともに、当時の幻住派のリーダー的な存在であった。しかし、その後の幻住派の歴史をみると、ライヴァルであった知伝碩精の存在感はうすく、湖心碩鼎の影響



力ばかりがきわだつのは、幻住派のなかでの湖心碩鼎の画策（世論操作）による。湖心碩鼎は、おなじ遠溪祖雄系統の幻住派でありながら東海碩昕系統のラインにいた知伝碩精より抜きんでるために、師である一華碩由（東海碩昕とは兄弟弟子）の地位を向上させることで、玄室碩圭―一華碩由―湖心碩鼎の弟子筋を幻住派の正統ラインとして認識させるよう努力した。その思惑が成功したことは、たとえば高源寺に出世する幻住派僧が、圧倒的に湖心碩鼎系統の禅僧で占められていることをしめす史料しか残されていないという事実がはつきりと物語っている。現在、一華碩由の伝記が華々しく語られているのも、湖心碩鼎による飾り立てがあったからであり、その伝記自体、湖心碩鼎の手によって書かれていた。こうして、湖心碩鼎系統の幻住派は、正統なる幻住派として認知され、幻住派のリーダー的な存在として君臨していくのである。

湖心碩鼎の活躍もあり、博多聖福寺は幻住派の一大拠点となった。聖福寺のなかには多くの塔頭があり、それぞれの開創者は幻住派以外の人びとであったにもかかわらず、戦国期にはそれら多くの塔頭に幻住派の人びとが進出した。さらに、隣り合う博多承天寺にも幻住派の影響力は及んだ。ほんらい、承天寺は鎌倉時代に活躍した円爾という禅僧の弟子筋しか入ることのできない特殊な禅寺（つちえん度弟院）であったが、このころには幻住派の影響を受けた駿岳碩甫や九白元菊がいた。とくに、駿岳碩甫は承天寺の本寺となる東福寺の住持だけでなく、丹波高源寺の住持ともなっていた。このように、博多地域の禅宗界は、聖福寺を拠点とする幻住派の勢いに席卷されていたのである。

湖心碩鼎の弟子筋からは、聖福寺住持となる景轍玄蘇（百九世）・耳峰玄熊（百十世）らがつぎとつぎと輩出された。博多の幻住派は、博多から京都の中央禅宗界をも席卷し、さらには遠く関東の禅宗界までも進出したのである。まさに、十六世紀という戦国時代にあった日本禅宗界は「幻住派の世紀」であった。

## 五 アジアにはばたく幻住派

無隠元晦系統の幻住派であった彌中道徳が、大内氏の肝いりで朝鮮国へ外交僧として渡ったように、戦国時代の幻住派は当時の日本の外交を牛耳っていたといつてもいいほどの活躍をしている。彌中道徳自身、中国と琉球王国に二度ずつ、朝鮮国には三度渡ったことがあるとかたるほど外交にひいでた禅僧であった。

幻住派の外交僧としてもつとも有名なものが、これまで何度も名前を出している聖福寺の湖心碩鼎である。日明貿易を独占した周防山口の大内義隆は、天文七年（一五三八）に出発する遣明船の正使として湖心碩鼎を抜擢した。湖心碩鼎は、日本から中国へ派遣される正式な外交官として、大陸で外交儀礼をおこない、貿易の実務をとりしきったのである。また、多くの聖福寺の僧侶がこの遣明船に乗船して大陸に渡っているのは、大内氏が博多における遣明船の基地として聖福寺を位置づけたからである。この時、湖心碩鼎の遣明船を操縦していたのは神屋運安・長秀親子であった。彼らは有名な博多商人で、世界遺産となった石見銀山を開発した神屋寿禎や、のちに活躍する神谷宗湛とは同族となる。湖心碩鼎は、このような博多の有力者たちとも深い関係をもっていたのである。

一方、聖福寺の幻住派僧は朝鮮通交でも活躍した。その代表が湖心碩鼎の弟子であった景轍玄蘇である。筑前国宗像郡にいた大内氏の家臣河津隆業の子であった景轍玄蘇は、永祿五年（一五六二）に博多商人の金銭の援助を受けて聖福寺の住持となり、やがて天正八年（一五八〇）宗義調そうよしげのまねきによって対馬に渡った。対馬の厳原いづはらに以酌庵をひらいた景轍玄蘇は、以後、宗氏の主導する朝鮮通交の外交事務をつかさどる。豊臣秀吉によっておこなわれた文祿・慶長の役の時には、宗氏や小西行長の軍隊に従軍し、戦後は日本と朝鮮の

国交復活交渉に尽力した。景轍玄蘇のように、文祿・慶長の役で朝鮮半島へ渡海した多くの大名軍には、おのおのゆかりの外交僧がつきしたがっていた。毛利軍に従軍した嘯岳鼎虎（湖心碩鼎の弟子）、鍋島軍に従軍した是琢明琳（湖心碩鼎の弟子筋）のようにその多くは幻住派僧であり、京都における豊臣秀吉側近の外交僧として日本外交を差配した相国寺の西笑承兌も湖心碩鼎の孫弟子にあたる幻住派僧であった。まさに、「幻住派の世紀」であった十六世紀は、同時に幻住派僧によって日本の外交も主導的になわれていたのである。

## 六 幻住派僧による聖福寺復興活動

戦国時代の博多はさまざまな勢力の争奪地であったため、聖福寺も兵乱の被害をこうむることが多かった。しかし、聖福寺は戦乱のたびに幻住派僧の活躍によって復興をとげていた。

たとえば、「扶桑最初禅窟安国山聖福禅寺住持代々自筆之記録」（聖福寺蔵）は、開山である明庵栄西以来の聖福寺住持の名前が自筆で署名されていたものであった。しかし、天文二十四年（二五五五）の兵乱で失却してしまった。それを、この時すでに聖福寺住持をやめていた湖心碩鼎が復元したのである。策彦周良という禅僧が湖心碩鼎の肖像画にしるした文章では、湖心碩鼎を「中興日本最初禅窟」とよんでおり（三脚稿）、湖心碩鼎の活動は記録類の復元のみにとどまらず、禅寺全体の復興をしたことがわかる。

「聖福寺古絵図」（聖福寺蔵）は、「承天寺図」（個人蔵）とともに中世の博多が描かれた貴重な絵画資料である。絵図は、永祿六年（一五六三）の戦乱で半分以上を失ったため、同十三年（一五七〇）に幻住派の耳峰玄熊が絵図の残余を集めて修理したものが残っている。『安山借家牒』（聖福寺蔵）は、天文十三年（一五四四）聖福寺寺内町の一軒ごとの住人・地料・山口夫・小夫銭などの記録を湖心碩鼎らが作成した帳面である

が、おなじく永祿六年（一五六三）の戦乱でなくなってしまうたものを、元龜三年（一五七二）に耳峰玄熊が回復した。唐磬は樂器の一種で、湖心碩鼎が明から持ち帰ったものである。これが、やはり永祿六年に失われ耳峰玄熊によってもどされた後、ふたたび天正九年（一五八一）になくなり幻住派の嘯岳鼎虎によって回復されたことを、同十六年に茂林鼎猷（湖心碩鼎の弟子）が記している。戦国時代の聖福寺は、湖心碩鼎やその弟子たちによって、そのつど復興されていたことがわかる。なかでも、もつとも聖福寺復興に活躍したのが耳峰玄熊という禅僧であった。

耳峰玄熊は、はじめは玄履首座の弟子であったが、彼が早世したためその師に当たる伯琳玄虎に師事した。しかし、その伯琳玄虎も死去したため、耳峰玄熊は湖心碩鼎から伯琳玄虎の印可を受けている。その後上洛し、永祿三年（一五六〇）冬節建仁寺第二座となり、翌年春に聖福寺へ帰った。ここで、永祿六年（一五六三）の戦乱にみまわれた聖福寺を復興することになる。永祿七年（一五六四）薩摩大願寺の任命書ももらった後、同十年（一五六七）聖福寺百十世となった。翌年には、ふたたび上洛して建仁寺へおもむき、丹波高源寺に遠溪祖雄の祖師塔を拝した。永祿十一年（一五六八）には、高源寺の求めにおうじて同寺に入寺して紫衣を獲得した。現在、高源寺にはこの時の「耳峰玄熊入院法語」が軸装されて残されている。天正年間に入ると、建仁寺、天龍寺、南禅寺など京都五山の任命書をうける一方、ふたたび戦乱で荒廢した聖福寺の復興に尽力していく。また、天正十一年頃には「幻住堂上老師」と呼ばれる耳峰玄熊に対して熙春龍喜が手紙を送っており（『清溪稿』）、この頃耳峰玄熊が幻住庵にいたことがわかる。幻住庵の耳峰玄熊は、この他にも円覚寺侍司下宛に「官物未進之儀」を督促する文書を出していることが確認できる（『正観寺文書』）。

そして、耳峰玄熊の復興活動を援助したのが小早川隆景である。天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉によって九州が平定されると、筑前国の領主として名島城に居城を定めた小早川隆景は、戦火で焼失した博多の復

興をはかった。聖福寺の再建も、その博多復興政策の一環であったといつてよい。天正十五年八月十三日に耳峰玄熊が筑前芦屋の鋳物師大江氏重が制作した銅鐘を聖福寺に寄進しているのも、この再建活動ゆえである。ちなみに、聖福寺には玄良首座が寄付した木牌（仏殿に安置される三牌）があり、そこに「中興住持耳峯玄熊、天正十五年丁亥八月十三日」と刻まれている。系字からすると、玄良は耳峰玄熊の弟子筋と思われる。耳峰玄熊が聖福寺に銅鐘を寄進した日付と同日というのが興味深い。天正十七年（一五八九）七月には、小早川隆景も銅鐘を聖福寺に寄進している。隆景が寄進した銅鐘は、高麗時代の朝鮮鐘であり、めずらしいものであった。こうして、聖福寺の仏殿・開山堂・鐘樓・庫裏などの諸堂の再建をはたした耳峰玄熊は、みづから「聖福寺中興住持」となっており、また聖福寺も耳峰玄熊を「兩回中興の祖」とみなしている。

また、幻住庵には小早川隆景の手紙が伝わっている。この手紙のあて先は失われているが、おそらく「聖福寺文書」に山口宗永と相談して寺領三百石をあたえた内容の（文禄四年・一五九五）十一月二十五日の小早川隆景書状があるので、おそらくこの手紙もおなじ時に出されたものと思われる。幻住庵の件についても、同門の僧侶とよく考え、再興することが大事であるとのべており、幻住庵を保護する小早川氏の姿勢がわかる。

耳峰玄熊には文禄元年（一五九二）に南禅寺と建仁寺の住持任命書が出ているが、南禅寺に実際に入寺することはなく肩書きだけのものであった。幻住庵には、文禄二年（一五九三）九月にしろされた耳峰玄熊の墨蹟があるが、その名のりは「中華十二世前南禅耳峰玄熊」とある。「中華十二世」とは中峰明本の十二世孫をしめしており、中国禅宗界とのつながりを強く意識する耳峰玄熊の姿がわかる。また、「前南禅」とあるのは前年に南禅寺住持の任命書を獲得していたからである。

文禄三年（一五九四）八月には、寺沢広高の要請で唐津に移り、火災で焼失した近松寺と少林寺の中興開

山となっている。二つの禅寺は、かつて肥前松浦岸岳城の波多三河守親（鎮から改名）が湖心碩鼎をまねいて開山にすぎた禅寺であった。この後、耳峰玄熊は慶長四年（二五九九）九月十六日に示寂した。幻住庵蔵の「古過去帳」には、「慶長四亥九月十六日 聖福寺中興兼当山耳峰玄熊大和尚」として記されている。耳峰玄熊は、湖心碩鼎とおなじく戦国時代の聖福寺の歴史を知る上で重要な禅僧であったことがわかる。このように、戦国時代の戦乱の渦中にあった聖福寺を復興する中心となったのが湖心碩鼎や耳峰玄熊などの幻住派の禅僧であったことは重要である。いわば、聖福寺は幻住派によって掌握されたことを意味する。そして、湖心碩鼎と耳峰玄熊はいずれも幻住庵の世代でもあった。彼ら幻住派僧がいた幻住庵や聖福寺は、まさに戦国期禅宗界の中心的存在であったのである。

## おわりに

以上、鎌倉末期から戦国期における博多禅宗界の動向を、幻住庵や聖福寺を拠点に活動した幻住派僧の動向を中心にみてきた。とりわけ、戦乱で焼失した聖福寺を何度も復興するなど、博多地域を中心に勢力を展開した湖心碩鼎系統の幻住派の動向は注目に値する。中国地方の毛利氏の外護などを受けて、十六世紀後半以降には京都五山でも隆盛をほこるのみならず、一部は関東地域にまで流入したからである。また、明朝の朝貢・海禁体制によって宋元期以来の日中禅林の密接な交流が途絶えた結果、日本のなかの中国的世界であった禅宗界は、室町期以降、大陸的なモノに憧れつつも次第に日本化していった。その意味で、戦国期から近世初頭の日本禅宗界を象徴する存在となった幻住派のあり方は、まさに大陸の禅宗界とは異なるあゆみをもつた日本の禅宗を象徴するものであったのである。<sup>15)</sup>

註

- (1) 川添昭二「鎌倉時代の対外関係と文物の移入」(同著『日蓮とその時代』山喜房仏書林、一九九九年)。
- (2) 川添昭二「鎌倉初期の対外関係と博多」(箭内健次編『鎖国日本と国際交流』上巻、吉川弘文館、一九八八年)。
- (3) 川添昭二「鎌倉中期の対外関係と博多——承天寺の開創と博多綱首謝国明——」(『九州史学』第八八・八九・九〇合併号、一九八七年)。
- (4) 小島文鼎編『聖福寺史』(聖福寺文庫刊行会、一九六四年)、西日本新聞社編『聖福寺通史』(聖福寺、一九九五年)。
- (5) 広渡正利編『博多承天寺史』(文献出版、一九七七年)、同編『博多承天寺史補遺』(文献出版、一九九〇年)。
- (6) 拙稿「中世の崇福寺」(福岡市美術館学芸課編『大応国師七百回忌記念特別展 大応国師と崇福寺 図録』大応国師と崇福寺実行委員会、二〇〇七年)。
- (7) 川添昭二「博多円覚寺の開創・展開——対外関係と地域文化の形成——」(『市史研究ふくおか』創刊号、二〇〇六年)。
- (8) 鹿毛敏夫「日元禅僧の国際交流と大友氏」(同著『アジア戦国大名大友氏の研究』吉川弘文館、二〇一二年)。
- (9) 広渡正利編『石城遺宝』(文献出版、一九九一年)。
- (10) その他、上田純一『九州中世禅宗史の研究』(文献出版、二〇〇〇年)、拙著『中世日本の外交と禅宗』(吉川弘文館、二〇〇二年)なども参照のこと。
- (11) 無隠元晦については、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』(講談社、一九八三年)、無隠元晦条、渡辺雄二「二軀の無隠元晦像」(『デアルテ』第四号、一九八八年)、広渡正利「無隠元晦和尚伝」(文献出版、二〇〇一年)などが詳しい。
- (12) 以下の記述は、拙稿「東アジアをまたぐ禅宗世界」(荒野泰典ほか編『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、二〇一〇年)も参照のこと。
- (13) 本稿における幻住派の記述は、玉村竹二「臨済宗幻住派」および「法系の研究方法に関する一見解」(いずれも同著『日本禅宗史論集』下之一巻、思文閣出版、一九七九年)、橋本雄「丹波国氷上郡佐治莊高源寺所藏文書」(『東京大学日本史学研究室紀要』第三号、一九九九年)、拙稿「中世後期の臨済宗幻住派と対外交流」(註(10)前掲拙著『中世日本の外交と禅宗』所収)、拙稿「東アジア禅宗世界の変容と拡大」(川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会3 西国の文化と外交』清文堂、二〇一一年)、拙稿「足利学校と戦国時代の禅宗世界」(史跡足利学校研究紀要『學校』第一〇号、二〇一二年)に依拠している。
- (14) 福岡県文化会館編『天目山幻住庵所蔵目録——福岡県歴史資料調査報告書 第三集——』(福岡県文化会館、一九七九年)。
- (15) 註(13)前掲拙稿「東アジア禅宗世界の変容と拡大」。